

新聞を活用した「書く」力をのぼすための工夫

猪名川町立猪名川中学校 校長 北上 玲子
教諭 高橋 桂子

1 はじめに

本校は本年度より、N I E 推進の指定を受けた。手探りの中での実践であったが、まずは1年目ということもあり、「生徒に新聞を読む機会を与え、新聞に親しませること」、「新聞の特徴を踏まえた各教科の効果的な学習への工夫」という2点に重点を絞って本年度はN I E 実践を試みた。

N I E 事前アンケートを行った際、本校の第2学年の各家庭において新聞を購読している割合が4割弱でしかなかったことに驚いた。さらに、新聞を購読している家庭においても毎日新聞をめくり、読む習慣がある生徒にいたっては1割にも満たなかった。これは、学校、部活動、習い事、塾といった中学生の日々の多忙さが起因していることも考えられるが、まずは中学生を取り巻く環境として「新聞」が不在であることも最も大きな原因だと考えられる。そのような「新聞」の存在を生徒たちに伝え、吸収してもらうこと。そして、教科で新聞を用いる中で新しい発見や興味を引き出す中で、更に学習の力をのぼすことを目的とした。

2 実践の内容

N I E の実践は、3年生の社会科と理科、2年生の国語科で行った。本報告では、2年の国語科での実践を紹介したい。

(1) N I E コーナーの設置

2年生の各教室の前には生徒同士が自由にコミュニケーションや作業のできる広い「ワークスペース」がある。そこに、「N I E コーナー」を設置し、休憩時間などに自由に新聞に目を通すことができる一面を準備した。

切り抜きの内容は、その週の最も重要である記事はもちろん、できるだけ生徒の興味を惹くようなスポーツ記事、芸能記事、地域の記事、生活にまつわる記事、パズル、進路情報にまつわる記事等といった多岐の分野にわたって拾い、週に一度の更新で国語係を使って掲示をした。特に、数独やパズル、



(ワークスペースの一面に設けた
N I E コーナー)

またはドラえもんの豆知識といった記事には生徒たちが大変興味を示し、たくさん集まってくる場面もよく見かけた。また、その記事が話の種となり生徒同士の日常の会話が広がったり、休憩時間中に生徒同士でパズルを解くといった風景も度々見かけることがあった。

(2) スクラップに挑戦

「NIEコーナー」を設けた後、次第に生徒が新聞の面白さや、楽しみ方を体感できつつある頃を見計らい、各クラスの国語の時間を使って「スクラップ」にチャレンジした。

生徒一人一人に新聞を一部ずつ渡し、気に入った記事を切り抜かせ、要約とその記事への意見や感想を書かせた。

この授業でのねらいは、新聞に親しむことに加え、文章を「読む」→「まとめる」→「考える」→「書く」といった力を伸ばすことである。2学年には、「書く」ことが苦手で、主語や述語の整った文を組み立てて文章化することを苦手としている生徒が多い。よって、新聞の記事を読み、そこから文の組み立てや文章としてのまとまりを体得し、さらにそれを自分の言葉としてまとめる作業は、生徒たちの「書く」力の育成に大いに役に立ったといえる。

(3) 投稿に挑戦

スクラップにチャレンジした後、今度は自らの思いを「投稿」という形で表現することに挑んだ。

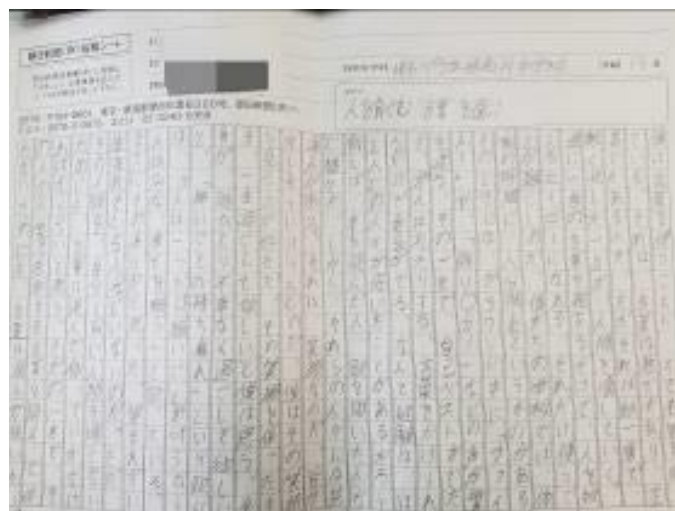
苦手な「書く」領域であるが、スクラップで学んだ文章の作り方、まとめ方から、さらに自分自身の考えを論理的に正しく述べる段階へとステップアップさせた。この実践においては、正しい文だけ



(NIEコーナー)



(スクラップの一部)



(生徒が書いた投稿の一部)

でなく、相手に自分自身の気持ちを不特定多数の方に分かりやすく伝える力も必要になる。また、字数も制限がある中で、その字数内に収める必要もある。

この実践においては、単純に「書く」作業だけではなく、「人を惹きつける文章を書く」という部分に力を置いた。どうしたら、「もっと先を読みたい。」と思ってもらえる文を作ることができるのか。生徒一人一人の作文を推敲し、対話も交わしながら文章を作っていく、作業をした。

(4) 文学新聞の作成

本年度の実践での一番の収穫は「文学新聞」の作成である。夏休み前に、新聞の仕組みについて学び、夏休み中に自分自身の興味ある作家や作品について調べあげ、それをもとに2学期にB4の原稿用紙に自ら新聞を作った。

生徒らは各自で図書館やインターネットで調べたが、中には夏休み期間を利用して資料館を訪ねて作家や作品について調べた生徒もいたことには感心した。

新聞の仕組みや見出しの方法などを学び、それを具体的に1枚の更紙に描くことは当初とても困難な作業であり、レイアウトや、見出しの文字の大きさ、文を

縦に書くか横に書くかといった工夫などもそれぞれが考え、また、最終的に色を入れることにより、各生徒がそれぞれ読み手に見やすい新聞を作ることができた。

文章をわかりやすい文で構成するだけでなく、イラストや写真や色を加え、視覚で訴えることで読み手にはよりわかりやすく感じられるということを学んだ。作品は、10月に行われた校内の文化祭や、11月に行われた阪神中学校国語研究部会芦屋大会にも掲示し、反響が大きかった。



(文学新聞)

(5) 新聞記者を招いて

直接「書く」ことには関連はしないが、9月に読売新聞社阪神支局より望月弘幸記者を招き、「記者という仕事について」という演題で、新聞記者という仕事を通して得られたこと、感動したこと、辛かったことなど、特に道徳的な観点から話を講演していただいた。

普段、新聞記者という仕事を持つ人と関わる機会がない生徒らにとって、「新聞記者」という職業を知る大きな機会と



なった。

生徒の感想からは、「記者の仕事は取材するだけでなく、その取材をもとに文章にして新聞にすること」「新聞記者という仕事を通して、いろんな人たちとの関わり合いができたこと」「身近な問題を解決する糸口になり得た」という内容を印象深く感じたといった声をたくさん聞くことができた。



(記者を招いた講演)

3 さいごに

1年間を通して行ってきた、国語科におけるNIEの実践を以上のようにまとめた。当初は何をどう始めたらいいのかわからない状態での取り組みであったが、目標と目的を見据えることによって、だんだんとやるべきことが見つかってきたと言える。

そして、「新聞」という生きた教材を使うことによって、普段は見ることのできない生徒たちの興味分野を知ることができたり、コミュニケーションの広がりをも確認したりすることができた。

特に、「書く」ことに特化した授業を行う際、新聞は、正しい文章の見本ともなり、また、まとめたり投稿にチャレンジしたりする中で「書く」訓練にもなる有効的な教材であるといえる。NIE実践で、授業内で「書く」ことが増えたことは言うまでもない。

新聞を使った授業は、展開するほどに、あらゆる方向で国語力を高めてくれることも間違いないと考える。ただし、教科書を使った授業や、受験に向けた学習といった点における活用は、時間的にもまだまだ工夫が必要なところであると考えます。

また、新聞の購読が半数を下回っている事実も、考えていかなければならない。現代は情報化社会であり、インターネットですぐに知りたい情報だけを検索することができ、個人が必要とする情報には事足りている。そちらのほうが経済的でもあり、また環境的にもかさばらない。しかし、今後、新聞を活用した学習を展開していくのであれば、学校だけでなく、家庭にもすぐに新聞が手に取れる環境を大事にしたいところである。

新聞を使った、生きた学習を！学校だけでなく社会全体で展開していきたいものである。

今回は2年生の国語科に的を絞り、実践をまとめた。次年度は他教科においても、実践を試み、学力の向上につなげていきたいと考える。